

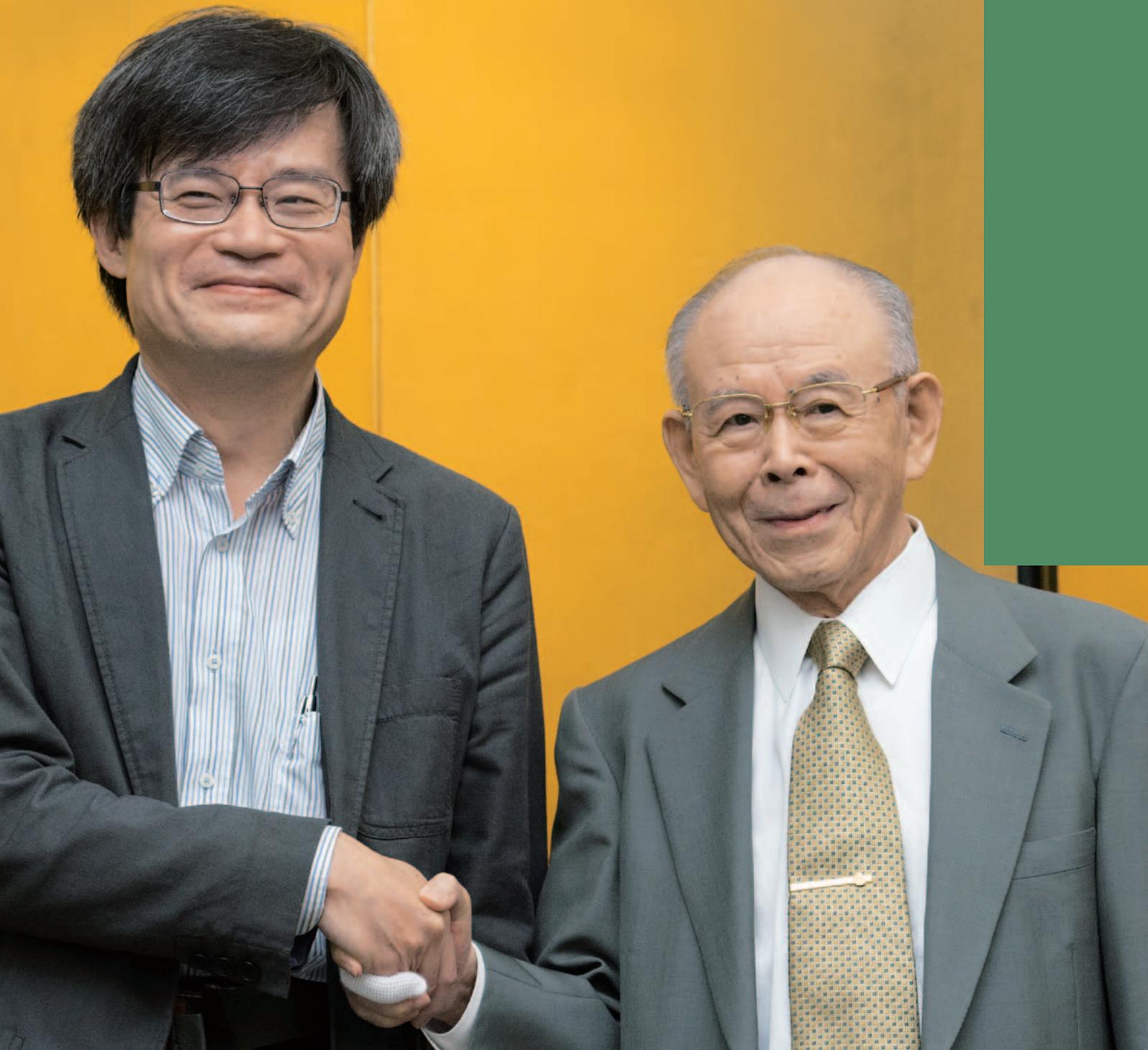
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.257

2014年10月

赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が 2014 年ノーベル物理学賞を受賞



目次

●ニュース

赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が2014年ノーベル物理学賞を受賞 3

ESD 大学生リレーシンポジウムを開催 6

チャタムハウス・シンポジウムを開催 7

渡辺理事がアジア中南米協力フォーラム（FEALAC）の会合において講演 8

「企業と博士人材の交流会」を開催 8

本学漕艇部学生が全日本大学選手権大会で優勝 9

本学フォーミュラチーム FEM が全日本学生フォーミュラ大会で総合優勝 9

公開講座「有形遺産とまちの魅力」を開催 10

「3D プリンターを使って臓器モデルを作ろう！」を開催 10

●知の未来へ

細胞分裂の対称性維持の仕組みとその意義 11

清光 智美（大学院理学研究科助教）

●知の先端

労働法における正義とは何か 12

和田 肇（大学院法学研究科教授）

●キャンパスクローズアップ

附属中・高等学校 交流棟（Affiliated Upper and Lower Secondary Schools, School of Education, Koryu Building） 14

●部局ニュース

『備える 3.11から』ライブ！』を開催 16

SGH アソシエイト校プログラム「グローバルディスカッション」を開催 17

サマースクール「アジアの法と社会2014」を開催 17

第2回神経回路国際シンポジウムを開催 18

国立台湾大学気象・気候災害研究センターと学術交流を締結 18

平成26年度 SSH 重点枠事業ワークショップを開催 19

ミクロの探検隊®を開催 19

第2回地球教室を開催 20

高校生防災セミナーを開催 20

●受章者一覧 21

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成26年8月16日～9月15日 25

●イベントカレンダー 28

●ちょっと名大史

神宮皇学館文庫と神宮皇学館大学関係文書 32

2014年ノーベル物理学賞を受賞 赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授が



会場で青色 LED を手に持つ赤崎特別教授（左）と天野教授（右）

スウェーデンの王立科学アカデミーは、10月7日（火）、2014年のノーベル物理学賞を赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩工学研究科教授ら3名に贈ると発表しました。両氏の受賞理由は、『明るく省エネルギーの白色光源を可能にした高効率の青色発光ダイオードの発明』です。両氏は本学において、当時、20世紀中には実現不可能と考えられていた青色発光ダイオード（LED）の開発に取り組み、1985年にはLEDの材料となる無色透明な結晶を作ること成功、その後、1989年には高輝度青色LEDの開発に世界で初めて成功しました。現在では様々な分野において活用されています。

赤崎特別教授は、昭和34年に本学工学部助手になられ、同学部講師を経て昭和39年に同学部助教授に就任、同年、本学において博士学位を取得されました。その後は民間企業に移られ、昭和56年に本学工学部教授、平成4年に本学名誉教授、平成16年12月からは、本学特別教授に就任いただいています。

天野教授は、昭和58年に本学工学部を卒業、昭和63年に本学大学院工学研究科博士課程後期課程単位修得後、同年工学部助手に就任、平成元年に本学において工学博士の学位を取得されました。その後、名城大学に移られ、平成22年から本学工学研究科教授に就任されています。



青色LEDが組み込まれた豊田講堂時計台



名城大学での会見の様子（左から、赤崎特別教授、中根名城大学学長、総長）



広報プラザでの会見の様子



赤崎記念研究館での垂れ幕設置の様子

当日は、午後6時45分頃、インターネット上で受賞決定が発表されると、報道陣が待機していた広報プラザは騒然となりました。発表時、フランスへ出張中であった天野教授の研究室では、学生らが作成した天野教授の等身大パネルを囲み、受賞の喜びを分かちあいました。

午後7時15分からは、現在、赤崎特別教授が終身教授に就任されている名城大学において記者会見が行われ、本学から濱口総長が出席しました。会見の中で赤崎特別教授は本学在籍時の研究について、自分の好きな分野を自由に研究することができたこと、当時から続く本学の自由闊達な学風などについて述べられました。総長からは、赤崎特別教授らの発明が私たちの日常生活に欠かせない技術となっていることなど、今回の授賞に対する祝福のことが述べられました。

その後、午後9時から、本学広報プラザにおいて記者会見が行われ、総長、松尾副総長、松下工学研究科長をはじめ、両氏にゆかりのある澤木宣彦本学名誉教授、竹田美和本学名誉教授が出席しました。会見では記者からの質問に対して、今回の授賞理由における学術的な説明、両氏の間柄、研究のエピソード、人柄などが述べられました。また、2008年ノーベル物理学賞を受賞した素粒子宇宙起源研究機構長の益川敏英本学特別教授もインターネット電話により会見に出席し、両氏の受賞に対して祝福のことが述べました。

受賞発表の翌日、8日(水)の午前には赤崎記念研究館において両氏の受賞を記念した、垂れ幕が設置され、総長をはじめ、役員、教職員、学生など、その場に集まった方々のカウントダウンにより垂れ幕が下ろされました。



1984年、追い出しコンパでの記念撮影
(画像提供：科学技術研究機構 サイエンスチャンネル)



天野研究室メンバーとの記念撮影

また、天野教授が帰国された10月10日(金)には、シンポジオンホールにおいて、記者会見が行われ、本学関係者、報道関係者ら約200名が出席しました。前半は、天野教授、総長、松下研究科長の3名が登壇され、後半は赤崎特別教授、中根名城大学学長同席のもと、合同記者会見となりました。赤崎特別教授がシンポジオンホールに到着すると、受賞後、初めて会われた両氏の間で握手が交わされました。会見の中で、赤崎特別教授からは、天野教授とともに受賞が決まったことへの喜びのことが述べられ、天野教授からは、今回の受賞に対する喜びと日本での盛り上がりの大きさへの驚きなどが述べられました。



1984年、修士論文発表会の後
赤崎教授(当時)を囲んでの記念撮影

赤崎特別教授及び天野教授のノーベル物理学賞受賞についての総長のコメント

この度、赤崎 勇本学特別教授及び天野 浩大学院工学研究科教授がノーベル物理学賞を受賞される栄誉に輝かれましたことは、誠におめでたいこととあります。

両教授におかれましては、赤崎特別教授が工学部教授として本学在籍時に天野教授が学部生として共に研究を進められ、当時、20世紀中には実現不可能と考えられていた高性能 GaN系 p-n 接合青色発光素子(青色発光ダイオード)を実現し、半導体研究に革命を起こされました。赤崎特別教授及び天野教授が、本学在職中に進められた研究が評価されたことは大学として大変名誉なことであり、心から嬉しく思います。

両教授のご研究は、現在、携帯電話のバックライト、大型ディスプレイ、植物栽培用光源、省エネ効果が高い交通信号などに役立てられ、また、情報の高密度記録・高速処理を可能にするなど、私たちの日常生活にとって必要不可欠なものとなっています。現在でもその用途は広がりを見せており、更なる発展が期待されています。

この度の受賞により、本学の研究教育活動が大いに奨励され、併せて我が国における学術研究が更に一層強力に推進されることを心から信じて期待しております。

平成26年10月7日
名古屋大学総長 濱口道成

ESD大学生リレーシンポジウムを開催



午前の部オープニングの様子

ESD 大学生リレーシンポジウム「地域協働で減災ルネサンス」が、8月23日(土)、東山キャンパスにおいて開催されました。このリレーシンポジウムは、愛知学長懇話会が、ESD (Education for Sustainable Development) 10年の最終年となる今年11月に愛知・名古屋で「ESD ユネスコ世界会議」が開催されるにあたり、1月から全7回シリーズで開催しているもので、今回は第6回目にあたります。

このリレーシンポジウムは、「ESD ユネスコ世界会議」で取り上げるテーマから、各大学で取り組んできた教育・研究活動を発表し、多くの方から理解を得るとともに、特に大学生の視点から考え、学び、議論することを通じ、持続可能な未来を構想できる人材、すなわち、ESDの視点を持った活力ある人材を育成することを目的に行っています。

今回、本学では、「災害と持続可能性」をテーマとし、「地域協働で減災ルネサンス」と題して、防災・減災活動を前向きに捉え、日常的な協働を活性化することで地域の新たな活力を生み出し、減災ルネサンスともいべき地域社会の新しい展開を目指してシンポジウムを開催しました。



トークセッションの様子



あいさつする総長

午前の部は、ES 総合館、野依記念学術交流館等に分かれて「若者が考える：未来の防災・減災社会」、「市民の自慢：なるほど防災・減災ことはじめ」、「企業人大集合!! 防災・減災ことはじめ」、「自治体発!! 地域協働のススメ」、「研究者が考える：魅せる減災まちづくり」の5つのワークショップが開かれ、それぞれの立場で考える減災について討論、意見交換、発表を行いました。午後の部では、豊田講堂ホールで約330名が出席し、本学卒業生のラジオDJである磯谷祐介氏の司会のもと、室崎益輝公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長による基調講演、「減災の取り組みと地域協働のあり方」が行われました。講演の後、午前に行われた「若者が考える」のワークショップであいちESDアワードに選ばれた、愛知県立知立東高等学校及び名古屋学院大学からの発表と表彰式が行われました。引き続き、福和減災連携研究センター長の進行のもと、各ワークショップの代表者によるトークセッションが行われ、各ワークショップでの成果を共有し、世代や立場を超えて協働の大切さを確認しました。コメンテーターとして登壇した濱口総長や鮎京理事はそれぞれ医学、法学分野の研究者としての立場から、今後の防災・減災活動のあり方への助言を述べ、シンポジウムは盛況のうちに閉会しました。

チャタムハウス・シンポジウムを開催



質疑応答の様子（左が内山田会長、右が麻生副総理）

英国王立国司問題研究所（通称：チャタムハウス）シンポジウム「変貌するアジアにおける日本の新たな役割」が、8月31日（日）、豊田講堂において、本学とチャタムハウスとの共催により開催されました。一般の方を含めて、総勢1,000名を超える参加がありました。

チャタムハウスは、1920年に設立された非営利・非政府のシンクタンクで、国際社会の現代情勢を分析することを主たる任務としています。2013年にはペンシルヴァニア大学が発表した「Global Go To Think Tanks Report」において、米国のブルッキングス研究所に次いで世界で2番目に影響力のあるシンクタンクと位置付けられました。2009年には『Foreign Policy』誌においてもアメリカ以外では最高のシンクタンクと評されており、世界的な評価を誇っています。

今回のシンポジウムの特徴の一つは、ロンドンのチャタムハウスで行われているラウンドテーブルを豊田講堂の舞台上で再現すること、それを多くの方々が視聴するということが挙げられます。これは、舞台上において、座長、講



あいさつする総長



「大学の新たな役割」についてのディスカッションの様子

演者、パネリストを、公募により選ばれた参加者が囲み、参加者もディスカッションに積極的に参加するというものです。これをフロアの聴講者も視聴し、フロアからも質問やコメントを募る参加型のシンポジウムです。

シンポジウムの冒頭、パオラ・スバッキ チャタムハウス研究部長、マイケル・シアラー在大使館総領事による開会あいさつがあり、続いて、麻生太郎副総理・財務大臣・金融担当大臣及び内山田竹志トヨタ自動車株式会社取締役会長による基調講演が行われました。

麻生副総理からは、アベノミクスによるこれまでの成果、現状を踏まえた今後の更なる展開のための提言について、また、内山田会長からは、イノベーションへの取り組み、人材育成から、理系女子の活躍等、その後のディスカッションの基調となる講演がありました。講演後の質疑応答では、会場からの質問に対する両氏の意見が述べられました。

引き続き、「規制緩和」、「大学の新たな役割」、「企業の新たな役割」の3つのテーマ別セッションが行われ、参加型のディスカッションが展開されました。本学からは、「大学の新たな役割」のセッションを渡辺理事が行い、磯田アジア・サテライトキャンパス学院長がディスカッサントとして登壇しました。また、「規制緩和」のセッションには、佐藤宣之経済学研究科教授、「企業の新たな役割」のセッションには、松中 学法学研究科准教授が、それぞれディスカッサントとして登壇するとともに、10名の大学院生が参加者として舞台上上がりました。登壇した学生は、政府関係者、研究者、産業界関係者等、日・英の著名なスピーカーやディスカッサント、多くの聴講者を前に、物怖じすること無く議論に参加していました。

最後に、濱口総長から、主催者、登壇者、準備から実施に関わった全ての関係者へ感謝が述べられ、本日参加し、活躍した学生を讃えるメッセージ、更には、今後の本学の国際展開などに触れ、シンポジウムは閉会しました。

渡辺理事がアジア中南米協力フォーラム (FEALAC) の会合において講演

渡辺理事は、8月20日(水)、タイ王国教育省から招待を受け、バンコクで開催されたアジア中南米協力フォーラム (FEALAC) の高級実務者会合関連の「第1回 FEALAC 学者、大学、科学・技術、イノベーション会合」に出席し、国際学術コンソーシアム (AC21) 事務局長として講演を行いました。



セッションの様子

FEALAC は、36カ国にのぼる加盟国間の友好協力関係や政治的対話の促進、経済や貿易など様々な分野における交流と協力の拡大などを目的として設立され、外相会合や高級実務者会合、作業部会を定期的に開催しています。

渡辺理事の講演は、「学術・研究ネットワークのベスト・プラクティス」のセッションで行われ、AC21とその活動の紹介をはじめ、活動を通して強化されたメンバー大学間のネットワークがどのような効果を生み、大学の国際化に寄与しているかについて、本学を事例に説明しました。会場からは、AC21がコンソーシアムとして順調に機能している秘訣などについて多くの質問が寄せられました。

本会合には、加盟国の大使やタイ教育省関係者、大学・研究所関係者など約120名が参加し、同セッションでは、アジアや中南米におけるベストプラクティスの事例として、ASEAN 大学ネットワーク (AUN) やラテンアメリカ・カリブ諸国大学連合 (UDUAL) の代表者からも組織・活動紹介があり、活発な議論が繰り広げられました。こうした事例を参考に、今後、FEALAC を通じて両地域間で学術交流・協力を促進するにあたっての優先分野や、ネットワークの構築方法について意見交換が行われました。

「企業と博士人材の交流会」を開催

「企業と博士人材の交流会」が8月30日(土)、豊田講堂・シンポジオンホールにおいて開催されました。本交流会は、本学の6つの博士課程教育リーディングプログラム、社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センター及び学生支援課就職支援室の企画で実施しました。来場者数は昨年度から大幅に増加し、企業は43社、博士人材 (博士課程後



学生によるプレゼンテーションの様子

期課程学生やポストドクター等) 115名の計215名の参加がありました。

第1部は、博士課程教育リーディングプログラムに在籍する博士課程学生等53名が、ポスター形式で研究成果や自己PRについてプレゼンテーションを行いました。発表者たちは学会での発表とは異なり、一般の方に研究や自分自身に興味を持ってもらうことに苦勞しながらも、企業側から様々なアドバイスを得て、今後の研究の方向性や自己PR方法について学びました。

第2部では、104名の博士課程後期課程学生やポストドクター等が参加しました。最初に、博士人材の採用を希望する企業側から2分間のプレゼンテーションが行われ、その後、学生たちが興味ある企業のブースを訪れる形式を取り、企業側の博士人材に対する期待とニーズ、産業界で活躍したいという博士人材の熱意が交わり、相互理解のための真剣な議論の姿が印象的でした。

今後、本交流会を通じて、博士人材のインターンシップが活発になり、就職に繋がっていくとともに、大学と産業界の相互理解を深めることにより、共同研究・イノベーションに発展していくことが期待されます。

本学漕艇部学生が全日本大学選手権大会で優勝

本学漕艇部に所属する農学部4年の榊原舞子さんと医学部保健学科3年の関根優佳さんが、8月下旬に埼玉県戸田ボートコースで開催された、第41回全日本大学選手権大会（インカレ）ボート競技女子舵手なしペア種目で、優勝を果たしました。これは新制大学漕艇部となってから初めての快挙となります。



結果報告での記念撮影（左から、中野漕艇部部长、関根さん、榊原さん、総長、國枝理事）

本種目は、選手2名が、各自1本ずつのオールを持って漕ぐ競技ですが、本大会（2000m）の決勝では、先頭の立命館大学をじりじりと追いつけて抜き、1.23秒差をつけて逃げ切るという緊迫したレース展開となりました。

また、榊原さんと関根さんのペアは、9月上旬に戸田ボートコースで開催された第92回全日本選手権大会の女子舵手なしペア種目に出場し、決勝では、接戦の末に立命館大学に惜しくも敗れたものの、準優勝という輝かしい結果を残しました。

大会終了後、漕艇部から濱口総長への結果報告が行われ、濱口総長からは今回のめざましい活躍と文武両立の実践に対し、ねぎらいのことばと今後の更なる活躍に期待が寄せられました。

本学フォーミュラチーム FEM が全日本学生フォーミュラ大会で総合優勝

本学フォーミュラチーム FEM が、9月上旬に静岡県小笠山総合運動公園で開催された、第12回全日本学生フォーミュラ大会において総合優勝を果たしました。これは同クラブ結成以来、初めての快挙となります。

本大会は、社団法人自動車技術会が主催しているもので、学生自らが構想・設計・制作した車両により、ものづ

くりの総合力を競う大会です。競技内容は書類審査、車検審査をはじめ、コスト、デザイン（設計）、プレゼンテーション種目からなる静的審査、アクセラレーション、スキッドパッド、オートクロス、エンデュランス、効率種目からなる動的審査があり、各種目について審査・採点が行われました。

フォーミュラチーム FEM は、本大会において、プレゼンテーション審査、エンデュランスで1位を獲得するなど、総合得点891.49点（1000点満点中）を記録し、総合優勝を収めました。

大会終了後には、フォーミュラチーム FEM から学生支援担当である國枝理事への結果報告が行われ、國枝理事からは、今回の快挙に対するねぎらいのことばと、優勝マシンについての専門的な質問があり、学生もそれに対して熱心に説明をしていました。



大会会場での集合写真

公開講座「有形遺産とまちの魅力」を開催

平成26年度公開講座「有形遺産とまちの魅力」が9月6日(土)、松本市上土ふれあいホールにおいて開催されました。この公開講座は、重要文化財馬場家住宅研究センターと松本市教育委員会との共催により開催されており、昨年引き続き、松本・中信地域での遺産を考える講座となっています。



女鳥羽川・中の橋から市街地の風景を確認する参加者

今回は、建築や風景などの有形遺産とまちの魅力を考えるというテーマで行われました。講座の冒頭で、西澤泰彦同センター副センター長から、「まちの魅力を創る有形遺産」と題した講演が行われました。その後、参加者は2コースに分かれ、同センターの教員とともに90分程度、松本市街地を歩き、さまざまな有形遺産の存在を確認しました。安全面の配慮から、募集定員を16名としましたが、同人数の応募がありました。会場に戻ってから、まとめの作業とその成果発表が行われました。参加者からは、「市街地をよく歩いていても気がつかないことがたくさんあることを認識した。これを機会にまちをよく見たい」などの感想が寄せられました。

「3D プリンターを使って臓器モデルを作ろう！」を開催

中高生向け講座「3D プリンターを使って臓器モデルを作ろう！」が、8月21日(木)、22日(金)、IB 電子情報館において開催されました。これは、病院などで撮影されるCT 画像をコンピュータによって処理し、診断や治療などに役立つ「医用画像処理」を体験してもらうとともに、その結果を実際に3D プリンターで出力するというもので



医用画像処理を体験している様子

す。今回は、科研費新学術領域「計算海保学」のアウトリーチ活動の一環として、日本学術振興会が企画する「ひらめき☆ときめきサイエンス」として実施され、約60名の応募者の中から抽選で選ばれた12名の中高生が参加しました。

初日には、末松安晴日本学術振興会産学協力総合研究連絡会議委員から「ひらめき☆ときめきサイエンス」の趣旨説明の後、医用画像処理分野や、3D プリンターの簡単な原理について学びました。また、医師からはCT 画像の読み方の説明を受けました。午後には肝臓、気管支、腎臓の3つの中から造形したい臓器を選択し、これらの臓器の領域を画像処理によってCT 画像から取り出す処理を行いました。その後、各臓器の領域情報を3D プリンターへと送信し、夜間に3D プリントを行いました。

2日目は、造形された臓器モデルをプリンターから取り出し、サポート材除去などの後処理を行いました。また、臓器モデルの乾燥時間を利用し、情報基盤センターのスーパーコンピュータの見学やCT 画像を利用した大腸ポリープ診断支援システムの体験なども行いました。参加者は出来上がった臓器モデルに満足した様子でした。

細胞分裂の対称性維持の仕組みとその意義

清光 智美
大学院理学研究科助教

南部・小林・益川博士らによるノーベル物理学賞受賞以来、「対称性の破れ (Broken Symmetry、あるいは Symmetry Breaking)」という言葉はよく耳にするようになりました。細胞分裂の分野においても「対称性の破れ」は非対称分裂 (1つの細胞から異なる2つの娘細胞が生まれる分裂) に必須であり、細胞分化の基礎を成します。これまで非対称分裂は精力的に研究され、そのメカニズムが明らかにされてきました。しかしその一方で、対称分裂 (1つの細胞から等しい2つの娘細胞が生まれる分裂) の仕組みや意義は十分に理解されていません。一般にエネルギー的に安定な形は対称構造をとりますが、果たして細胞分裂の対称性も積極的な仕組みを必要とせずには達成されるものなのでしょうか?

私たちはこれまでに細胞が等しいサイズの娘細胞に対称に分裂 (等分裂) する仕組みについて研究を行ってきました。細胞分裂面の位置は染色体分配装置である紡錘体から出るシグナルによって規定されますので、等分裂するためには紡錘体が

細胞の中央に正確に配置されることが必要です (図1)。私たちは、等分裂する細胞において、紡錘体配置の偏りを自律的に感知し、修正する細胞内システムが存在するを見出しました (文献1)。また驚いたことに、分裂期後期においては、紡錘体を動かすのではなく、細胞膜を非対称に伸長し、細胞境界を変えることで紡錘体の偏りを修正する仕組みがあることも発見しました (図1右、図2、文献2)。これらのシステムの異常は不等分裂につながり、細胞サイズの減少に応じて細胞死が誘導される可能性も示唆されています。私たちが発見した細胞サイズ対称性維持の仕組みは新規で独自の知見を提供するものであり、今後これらの分子メカニズムを明らかにすることによって、細胞分裂の対称性・非対称性の理解や、新たな細胞機能の発見に貢献したいと考えています。

文献1. Kiyomitsu and Cheeseman *Nat. Cell Biol.* 2012
文献2. Kiyomitsu and Cheeseman *Cell* 2013

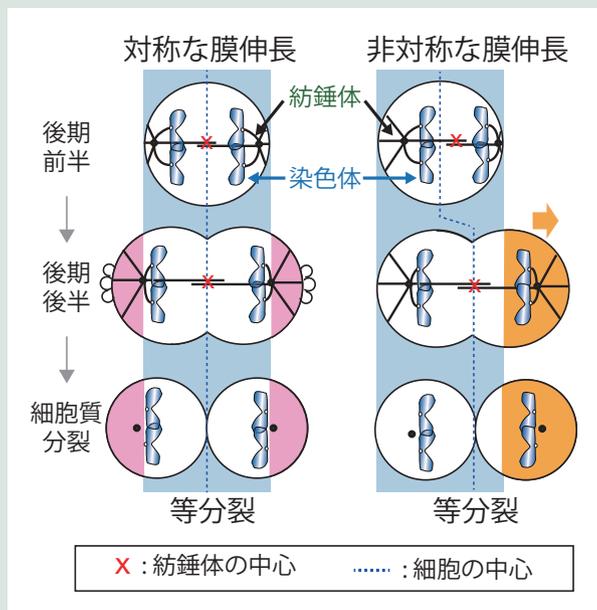


図1 非対称な細胞膜伸長による紡錘体の細胞中央配置
分裂期後期の前半終了時において、紡錘体が細胞中央に配置されている場合、細胞膜は対称に伸長する (左図)。一方、紡錘体が細胞中央からずれている場合、細胞膜は非対称に伸長し、細胞境界を非対称に拡張することで、紡錘体を細胞中央に配置する。文献2より引用。一部改変。

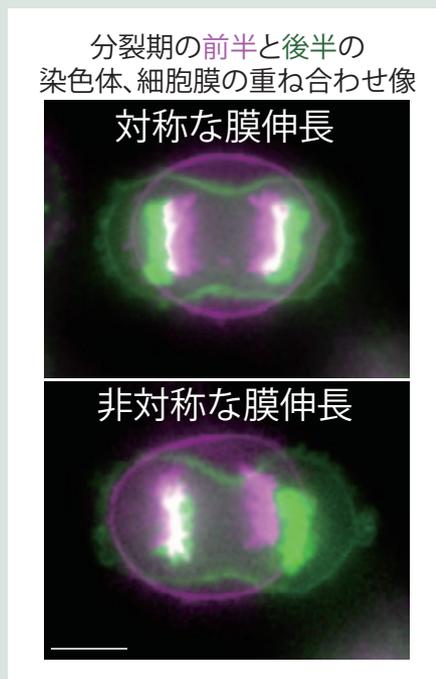


図2 分裂期後期の細胞膜伸長の様子
等分裂する細胞では、分裂期後期の染色体・紡錘体の配置に応じて、細胞膜が対称 (上段)、あるいは非対称 (下段) に伸長する。バーは 10 μ m。文献2より引用。一部改変。

労働法における正義とは何か

和田 肇 大学院法学研究科教授

私の研究テーマは何かと問われたら、「労働法における正義」の追究であると答えるのが一番適切だと思います。ただし、研究歴の中で具体的なテーマは変化しています。

封建制から近代への移行を、法律の世界で「身分から契約へ」（イギリスの法学者メイン）と表現することがありますが、しかし、今日の労働法の世界は単純に当事者の合意に基づく契約関係と捉えられない側面があります。労働者は使用者に対して、経済的（雇用への依存度の違い）、社会的（法律や情報のリテラシーの違い）、人的（指揮命令に対する服従）、あるいは組織的（工場労働、チームワーク労働）に「従属」している（abhängig）からです（ドイツの法律家ジンツハイマー）。これは一種の「身分」であり、そのことを考慮に入れて労働関係を再構成する必要があります。私が大学院時代から30歳代半ばまで行っ

た研究で、1990年に『労働契約の法理』（有斐閣）を上梓しました。

次の関心は、1980年代半ばのドイツでの在外研究を契機に、働き方の日独比較法研究に移りました。同じ敗戦国から出発しながら、働き方と休み方の彼我の大きな違いにショックを受けました（1991年の共著『休み方の知恵』（有斐閣））。日本では長時間労働が問題とされ、過労死現象が注目を浴び始めていた頃です。この違いは単に法制度の違いだけで説明できるものではなく、文化的背景（たとえばピーパー『余暇と祝祭』）や労使関係のあり方（ネオ・コーポラティズム）の違いを分析する必要があると考えました。2回目の在外研究時にヒアリング調査もだいたい行い、1998年に『ドイツの労働時間と法』（日本評論社）を上梓しました。しかし、正直言って、今でも彼我の違いが十分に説明し切れていません。私にとってはア



19世紀末から現在に至るまでのドイツ労働契約理論の歴史研究をベースに、日独比較法研究として、労働契約の意義、機能、特殊性を検討したものです。



先進国で最短期間に属するドイツの労働時間について、閉店法というドイツ固有の制度も含めて、その歴史的・宗教的背景、実態、法制度を分析したものです。



規制緩和論に対して労働法（学）はいかに立ち向かうべきなのかを検討したものです。私の研究のモチーフが一番現れている作品。



アベノミクスの労働法政策の問題点を剔抉した作品。雇用社会の持続性の危機が一層進行していくものと危惧する、筆者も含めた論者たちの共同作品。

ポリアの一つです。

1990年代に開始し、そして現在進行形で継続しているのが、労働法の規制原理（レーズンデートル）に関する研究です。このテーマに取り組み契機となったのは、この時期から始まった規制緩和政策です。戦後から1980年代までは、一方では「会社主義」、「企業中心主義」といわれる古い共同体的側面が残されているが、高度経済成長に支えられながら労働法は展開・成熟してきました。しかし、1990年代以降になると、経済のグローバル展開の中で、「国家的規制の失敗から市場の規制へ」というスローガンが声高く叫ばれ（新自由主義経済理論）、労働法の分野でも規制緩和政策に舵を切っていきます。労働者派遣に見られるような民間の人材供給会社の育成策と、企業における労働者の外部化・請負化あるいは非正規雇用化がその中心です。

私自身はこの時期から、市場は法的正義を実現できないと主張してきましたが、当時は多勢に無勢でした。しかし、その結果起きたのが、非正規雇用の急増と安定した雇用のために「死ぬほど」働かないといけない正社員という雇用の二極化、相対的貧困率の上昇（先進国ではアメリカに次いで第2位）、働いていながら貧困状態にあるワーキングプアの増加、女性の非正規雇用化、ブラック企業現象等です。それは、雇用社会の持続可能性（Sustainability）の危機、ILOのいうディーセントワーク（人間らしい働きがいのある労働）の危機、G20首脳宣言などがいう「質の高い雇用の



2007年9月にドイツ・フランクフルトのIGメタル本部で開催された第5回独日労働法協会・日独労働法協会共催の国際シンポの参加者（数年おきに日独で開催）。

創出」の危機と言えます。こうした問題意識から解決の糸口を探ったのが、2008年に出版した『人権保障と労働法』（日本評論社）です。Social Europa や Sozialstaat（ドイツの社会国家）をモデルとした国家的再規制、あるいは労働者個人の尊厳、平等、ワークライフバランス等の人権保障といったモチーフでの労働法のパラダイム転換を構想しています。

2008年秋のリーマンショックは、日本の雇用政策を反省する契機になり、民主党政権下で2012年には規制強化政策に転じましたが、今再びアベノミクスというより強力な規制緩和政策（政策全体は国家主義的性格を有しているが）が闊歩しています。この政策がそのまま実行されると、雇用社会は一層危機的な状況になると私は考えており、今はその体系的・批判的な分析を行っています。2014年の共著『日本の雇用が危ない』（旬報社）はその成果の一部です。

1954年長野県生まれ

東京大学法学部卒業、同大学院博士課程中退、名古屋大学法学部助教授を経て現職

ドイツ・ギーゼン大学客員研究員（文部省在外研究）、レーゲンスブルク大学客員研究員（アレクサンダー・フォン・フンボルト財団助成）、ハーゲン通信大学客員研究員（同）現在、日本労働法学会代表理事、日独労働法協会代表理事

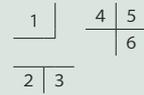
専門は労働法

無芸大食ですが、この夏は庭で収穫したり頂いた数種類の果実を使ってジャム作りに熱中しました。ドイツは私にとって永遠のマドンナです。

わた はじめ



45. 附属中・高等学校 交流棟 (Affiliated Upper and Lower Secondary Schools, School of Education, Koryu Building)



- 1 外観（東南面）
- 2 エントランス前の正面道路
- 3 1階 生物教室
- 4 3階 図書館
- 5 4階 和室（縁側）
- 6 中庭

附属中・高等学校交流棟は、所要室構成・全体配置からみても、附属中・高等学校の新たな顔となる建物です。これまで附属中・高等学校は正面道路より下がった敷地に位置し、大学構内にありながらも大学や外部との隔たりを感じさせていました。しかし交流棟のエントランスを正面道路レベルに合わせた2階に計画し、2階を学校全体のメインフロアと再定義することで、外部と既存校舎を繋ぎ、動線計画を一新させました。

1階には化学教室・生物教室を配置し、既存校舎1階の物理教室（中央棟）、地学教室（1号館）と合わせ、理科系の特別教室群を構成し、SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）研究指定校として、理数系教育の充実をはかっています。

2階のエントランスホールは、中学生・高校生・教職員をはじめ全ての来校者を迎え入れる場所であるため、2方向を外部に開放したピロティとし、内外の繋がりや採光、照明に工夫を凝らした





明るい空間となっています。また、生徒・教職員の安全を確保するために、エントランス周囲に管理諸室（警備員室、事務室、校長室等）を配置することで、大人の目が行き届き死角のない安全安心な学校として、防犯体制を充実させています。

3階の図書館は、正面の鏡ヶ池に向けて開放的な空間とし、閲覧だけでなく調べ学習、ディスカッション、小ゼミなどに活発に取り組める場となっています。また、連続する既存校舎屋上をゆとりある読書テラススペースに活用することもできます。このように交流棟に新設された新たな図書館は、機能や環境の充実した中高の学習拠点の役割を担っています。

4階の交流ホールは、国際交流の拠点、保護者との積極的な意見交換、地域の方との交流など、多方面に開かれた学びの場となっています。プレストレストコンクリート造を採用し、柱を無くした一体空間を確保したことで、様々な形態の交流に対応することができます。また、災害時には、交通事情の混乱により帰宅困難になった生徒の一時宿泊施設となるなど学内避難所としての役割も担っています。

交流ホールに隣接する和室には、木造の屋根組みや、縁側、石段などが室内に設置され、和の空間が広がっています。生徒が日本文化を理解するだけでなく、海外からの研修留学生や交換留学生・研究者等が日本文化を学び、生徒と触れ合う場となる他、グローバル人材の育成を目指した学部等との協同研究や交流活動を行う場となります。

省エネルギーに対する取り組みも様々行っており、高効率空調の採用、ソーラーパネルの拡充、



LED照明の設置などにより、消費電力の削減に取り組んでいます。他にも生徒や教員に省エネ意識を持ってもらうため、エントランスホールには現在の消費電力の使用状況がリアルタイムでわかる掲示板を設置するなど、より快適でエコな教育環境を実現しました。

また、この交流棟の新設に合わせて、「空き地」という認識だった中庭にウッドデッキとベンチを配置し、生徒が仲間と議論をしたり、一人で思考を巡らすことができる空間を造りました。人間関係が硬直化しがちな中高一貫教育において、新しい中庭が生徒の心を落ち着かせることのできる開放的で創造的な空間となることを期待しています。

このように附属中・高等学校交流棟は、グローバルな交流の拠点であるとともに、中高大接続における情報発信の中心的建物としての役割を担っています。

(施設管理部)

「『備える 3.11から』ライブ!」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、8月24日(日)、豊田講堂において、中日新聞社との共催により「『備える 3.11から』ライブ!」を開催しました。この催しは、同センターも協力している中日新聞掲載「備える 3.11から」の連載100回を記念して開催されました。

当日はまず、豊田講堂ホワイエ・アトリウムにおいて、「被災者の生の声」と題して、東日本大震災の被災者2名、伊勢湾台風の被災者1名の方への公開取材が行われました。東日本大震災で被災した女性からは、建物の屋上で津波の波しぶきを浴びながら待避した経験や、避難所での炊事等の仕事が不安や恐怖を紛らわした経験などが語られました。

引き続き、ホールにおいて被災者手記の朗読が行われ、東日本大震災で被災した方による悲痛な思いを綴った手記や失ってしまった人の結びつきに改めて感謝を示す詩が朗読されました。被災者の方へのインタビューでは、亡くなった方は戻らないが、教訓を未来で役立たせることが大切であることが語られました。



ペーパークラフト実験の様子



防災クイズの様子

座談会「被災地の記者たち」では、手書きの壁新聞「石巻日日新聞」の記者による体験談として、被災直後、被災地で求められたのは食料と情報であったことが述べられました。河北新報社の記者からは、「広く浅く」ではなく、地域に応じた「狭く深い」防災報道の必要性が述べられました。また、阪神大震災を取材した記者からは、阪神大震災を風化させない記事作りの紹介がありました。最後に福和減災連携研究センター長による「防災クイズ」が行われ、イベント参加者全員が参加しました。クイズの内容は、津波の速さやマグニチュードの意味、防災グッズに関すること等、地震に関わる知識や備えについて様々でした。

また当日は、タイアップ企画として減災館の見学会が実施されました。午前には、「建物まるごと振動実験」として、同館の免震装置を活用した、変位10cmの建物の加振実験が行われました。3回の実験で延べ600人の来館者があり、建物の揺れを体感するとともに、ビデオ映像を通じて同館の災害対応拠点としての機能について学びました。

午後からは「夏休み・スペシャル減災教室」として、同館の1階、2階の全体を使った小中学生向けの体感型学習イベントが行われました。台車を綱で引っ張ることによる長周期地震動体感、「10秒呼吸法」による災害時に心を落ち着かせる訓練、リアルな木造建物模型を使った耐震補強理論の学習、ペーパークラフト模型とストロー模型を使った地震に強い家づくり講座、ダミー人形を使った家具転倒被害の実験、空気砲を使った気圧観測機器のデモンストレーション、大型防災カルタ大会、防災紙芝居が実施され、70名ほどの親子連れが参加しました。参加した小中学生たちは各コーナーを回ってスタンプを集めることで参加賞を獲得し、熱心に参加する様子が見られました。

SGH アソシエイト校プログラム「グローバルディスカッション」を開催

●教育学部附属中・高等学校

教育学部附属中・高等学校は、8月25日(月)、高大連携・SGH アソシエイト校プログラム「グローバルディスカッション」を開催しました。現在、同校は、スーパーグローバルハイスクール (SGH) アソシエイト校に認定されており、このプログラムもその一貫として位置づけられています。



グループディスカッションの様子

今回は、SGH アソシエイト校である、海陽中等教育学校、神戸大学附属中等教育学校、東京学芸大学附属高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校の4校も参加し同校を含めた5校の参加で開催されました。「環境に関わるもっとも大きな課題とは？」というテーマのもと、5グループに分かれ、英語を使用言語としてディスカッションを行いました。各グループにはそれぞれ本学の留学生が数人ずつ参加し、ディスカッションの最後にはグループごとに英語で自分たちの考えを発表しました。

プログラムの最後には、土井康裕経済学研究科准教授から、「高校生に求められるグローバルな力について」というメッセージが語られました。参加した高校生たちにとって、自分自身のキャリアを明確化するよい機会となりました。

サマースクール「アジアの法と社会2014」を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、8月20日(水)から22日(金)の3日間、法学部棟第2、第3講義室において、サマースクール「アジアの法と社会2014」を開催しました。この催しは今年で6度目の開催となり、例年、日本全国から法学部生、大学院生、法科大学院生、社会人を含む、50名を超える参加者が集まりました。



ベトナムからの研修生と参加者とのディスカッションの様子

3日間のプログラムは、法律実務家と研究者によって、アジア法の理論的考察や法整備支援の現場の様子、アジア法研究や法整備支援の今後の展望等、多様な視点を扱った講義を中心に行われました。さらに、アジア諸国(ウズベキスタン、モンゴル、ベトナム、カンボジア)の日本法教育研究センターで日本語と日本の法律を学ぶ法学部生との合同セッションも開催され、アジア各国の法律問題・社会問題についてのディスカッションを行いました。懇親会も行われ、参加者にとって、アジア諸国の学生との交流を深め、今後アジアと関わる上での、貴重なネットワークを構築する機会となりました。

同サマースクールは、法務省法務総合研究所、公益財団法人国際民商事法センター、慶應義塾大学大学院法務研究科、神戸大学大学院国際協力研究科、早稲田大学法学大学院・比較法研究所、独立行政法人国際協力機構(JICA)、日本弁護士連合会、アジア法学会と協働で開催している次世代のアジア諸国法研究者や法整備支援の担い手を育成するための連携企画「アジアのための国際協力 in 法分野2014」の第2弾として開催され、今後は、11月に「法整備支援シンポジウム」の開催を予定しています。

第2回神経回路国際シンポジウムを開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は9月9日(火)、10日(水)の2日間、理学南館坂田・平田ホールにおいて、第2回名古屋大学神経回路国際シンポジウム「神経回路による情報処理を読み解くII」を開催しました。このシンポジウムは、森 郁恵同研究科教授を拠点長とする名古屋大学脳神経回路研究拠点の設立を記念して、今年3月に開催された第1



記念撮影

回シンポジウムをさらに拡大した形での開催となりました。博士課程教育リーディングプログラム「グリーン自然科学国際教育研究プログラム (IGER)」の全面的支援を受け、総勢80名ほどが参加しました。

シンポジウムでは、アメリカやヨーロッパの研究所、本学や東京大学で脳研究の最前線に立つ研究者など、神経科学分野におけるトップランナー11名による講演が行われました。講演後の休憩時間には講演者、参加者が入り混じり、活発な交流が行われました。また、ポスター発表では、大学院生、ポスドクを始めとした若手研究者らが自分の研究を発表し、講演者と堂々と議論する姿が見られました。若手からシニアまで一丸となって脳研究の将来について本気で議論する、密度の濃い2日間となりました。

国立台湾大学気象・気候災害研究センターと学術交流を締結

●地球水循環研究センター

地球水循環研究センターは、9月3日(水)、研究所共同館において、国立台湾大学気象・気候災害研究センターとの学術交流協定調印式を行いました。この協定は、2007年に調印された「国立台湾大学と名古屋大学の学術協定」に基づき、両組織間のさらなる研究協力の推進を図ることを目的として締結されました。



調印式の様子 (左が譚義績センター長、右が石坂センター長)

気象・気候災害研究センターは、1999年2月に国立台湾大学附置の研究センターとして設立され、気象のもたらす災害に関する研究及び気候変動に伴う極端気象に関する先端的研究を行っています。

調印式には地球水循環研究センターから、石坂同センター長、協定担当窓口である坪木和久同センター教授、上田 博同センター教授ら5名、気象・気候災害研究センターからは、陳泰然台湾大学前副学長、譚義績センター長及び周仲島教授ら9名が出席し、両センター長が協定書へ署名し協定が締結されました。

調印式後には、ミニワークショップが開催され、気象・気候災害研究センターから郭鴻基教授と張倉榮教授、同センターから坪木教授による講演が行われたほか、新たに導入された雲レーダの見学も行われました。

今回の協定締結により、共同研究や学生・研究者交流を通じて両組織に多くの学術的成果をもたらされるだけでなく、台風や大雨などの東アジアの国々が直面する様々な気象・気候災害に関する研究の発展が期待されます。

平成26年度 SSH 重点枠事業ワークショップを開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、8月24日(日)、25日(月)の2日間、遺伝子実験施設及び理学部生命理学科学生実習室において、平成26年度スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 重点枠事業ワークショップ「実習：光るタンパク質を取り出す。解説：遺伝子組換えとDNAシーケンス技術」を開催しました。今年で7回目の開催となる今回は、愛知県内



実習の様子

の5つの高等学校から6名の教員と高校生11名が参加しました。杉山康雄遺伝子実験施設准教授が講師を務め、3名のティーチングアシスタントが補佐として参加しました。

初日は、杉山准教授による遺伝子組換えについての解説に加えて、遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（通称カルタヘナ法）について説明がありました。その後、実習室へ移動し、ポリメラーゼ連鎖反応で増幅したDNA断片をベクタープラスミドにクローニングする方法及び緑色蛍光タンパク質（GFP）を大腸菌で発現誘導する方法を学びました。

2日目には、参加者全員の実験結果（大腸菌コロニーの様子など）を比較して遺伝子組換え技術について議論しました。そして、大腸菌で発現させたGFPを簡単に大腸菌から取り出す方法を体験しました。最後に、遺伝子実験施設に設置された次世代DNAシーケンサーなどを見学し、井原邦夫同施設准教授から、次世代DNAシーケンサーを使った最新の研究について説明を受けました。参加者にとって、法で定められたルールに従って行う遺伝子クローニング実験を学ぶ有意義な研修となりました。

ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館では、8月23日(土)に「ミクロの探検隊® 名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう！ー雑木林のムシー」を開催しました。小中高生を中心に抽選で選ばれた24名が参加しました。

今回は、野外での採集と実験室での観察の両方を体験するプログラムで、ミクロの探検隊®の中でも人気が高いイ



ビーティングネットを使って虫を採集する参加者

ペントです。まず構内の雑木林で、ビーティングネットを使用して、クモやゾウムシなどの小さな夏のムシを集めました。最初は、なかなかビーティングネットにムシが入らなかった小学生も最後にはすっかり上手になり、雨上がりでムシは少なかったものの、参加者は、数匹は採集することができました。その後、4月から新しくなった同館実験室において実体顕微鏡を使って、採集したばかりのムシを観察し、ムシの名前を調べたりスケッチをしたりしました。さらに詳細に観察するため、電子顕微鏡による観察撮影を行いました。参加者は初めてさわる電子顕微鏡と、そこに映し出される今まで見たことのないミクロの世界に引き込まれていました。アンケートの回答では、「科学への興味が出た、また参加したい」など、楽しみながら科学に触れたことがうかがえ、また、最後には自分自身で撮影したムシの電子顕微鏡写真を使ってポストカードを作り、これも夏休みの良い記念となり、参加者にとって充実した1日となりました。

次回の「ミクロの探検隊®」は12月23日(火・祝)に開催の予定です。

第2回地球教室を開催

●博物館

博物館は、8月23日(土)、24日(日)の2日間、今年度2回目となる親子フィールドセミナー「地球教室」を開催しました。この催しは、博物館と名古屋市科学館との連携事業の1つであり、フィールドでの標本観察・採集とラボでの実習を組み合わせた体験学習型の地域貢献活動です。

今回は「河原で宝石と歴史を見つけよう！」というテー



砂に含まれる鉱物を顕微鏡で観察する参加者の様子

マのもと、宝石は買うもの、歴史は本から学ぶものだけではなく、小さなものでも宝石や歴史を自ら発見することの楽しさをフィールド体験から参加者に感じてもらうことを目的に開催されました。夏休みの終わり近くに開催された今回の教室には80名近い応募があり、抽選で選ばれた小中学生と保護者及び一般の方をあわせて28名が参加しました。

1日目は、岡崎市の矢作川に出かけて、パンニングという方法を用いて川砂の中から比重の大きい鉱物を選別しました。2日目には、同館の実験室に場所を移して、川から採取した砂をシャーレにのせ、それを実体顕微鏡でのぞきながら砂に含まれる様々な鉱物を観察しました。鉱物の形や色、磁性を調べながら、ガーネットや磁鉄鉱、白雲母などを分類しました。また、観察に加え、矢作川周辺の歴史や土器・陶器について講義が行われました。川砂の採集・観察では、児童・生徒に加えて保護者の方々も体験に没頭している姿が印象的でした。この催しは、活動補助のために、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。

高校生防災セミナーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月24日(木)、25日(金)、28日(月)、8月26日(火)、減災館において、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」を開催しました。このセミナーは、将来的に、巨大地震等による大災害を経験する可能性がある高校生を対象として、災害発生の科学や減災対策、災害と付き合う知恵、「生きる力」を学



減災ホールでの高校生の発表の様子

び、自立して活動できる防災リーダーになってもらうことを目的として開催され、今年で5年目となります。夏休み期間中の4日間、座学・実学による学修と2学期の実践活動、年末の活動成果発表会から構成されており、今年度は新たに県内の高等学校15校から、高校生・教員合わせて75名が参加しました。

セミナーでは、同センター関連教員による地震や液状化、津波災害の発生メカニズムやその対策、防災・減災とまちづくり、災害医療に関する講義、愛知県防災局によるHUG（避難所運営ゲーム）、NPOによる防災ボランティアの役割に関する講義や災害図上訓練、また、各学校での防災活動のアクションプラン作成のワークショップ等が行われました。

8月26日(火)には、昨年度から参加しているIV期生の成果報告と今年度から参加したV期生の計画発表が行われました。IV期生からは、各校の特徴を生かしたこれまでの様々な取り組みが報告され、V期生からは、今回学んだことや今後の実施計画が発表され、会場との意見交換を行いました。今後は、12月に活動成果発表の場として高校生防災フォーラムを開催予定です。

受賞者一覧

日本学士院賞

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・職名 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|------------|---------------------|-------|----|
| H26. 7. 7 | 恩賜賞 日本学士院賞 | 特別教授 | 赤崎 勇 | |
| H26. 7. 7 | 日本学士院賞 | 大学院理学研究科特任教授 | 近藤 孝男 | |
| H26. 7. 7 | 日本学士院賞 | 大学院工学研究科 特別招へい教授 | 岡本 佳男 | |

教員

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・職名 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|---|---------------------------------------|-------|---|
| H25.10.17 | 2013年度 日本胸部外科学会 優秀論文賞 | 大学院医学系研究科教授 | 碓氷 章彦 | |
| H25.12.27 | 日本心理学会学術大会特別優秀発表賞 | 大学院情報科学研究科客員 准教授 | 久保 賢太 | 孫 曉森 (大学院情報科学研究科 M2)、 賀 洪深 (大学院情報科学研究科 M1)、 川合伸幸 (大学院情報科学研究科准教授) と連名 |
| H26. 3.11 | 情報処理学会 2013年度山下記念研究賞 | 大学院情報科学研究科 准教授 | 森崎 修司 | 他 1 名と連名 |
| H26. 3.20 | 公益財団法人かんぼ財団 平成25年度調査研究優秀研究奨励賞 | 大学院経済学研究科教授 | 柳原 光芳 | 進藤優子(大学院経済学研究科博士後期課程)、 盧 晨(大学院経済学研究科博士後期課程)と 連名 |
| H26. 3.28 | Best Short Paper 2014, 8th ACM Symposium on Eye Tracking Research & Applications | 大学院情報科学研究科助教 | 平山 高嗣 | 間瀬健二(大学院情報科学研究科教授)、 他 1 名と連名 |
| H26. 5.12 | 日本顕微鏡学会 第29回論文賞 (応用研究) | 大学院理学研究科附属 構造生物学研究センター 研究員・名誉教授 | 白倉 治郎 | 他 5 名と連名 |
| H26. 5.14 | The 2nd ITbM Research Award | 大学院理学研究科特任講師 | 新田 英之 | 金岡雅浩(大学院理学研究科助教)、 大石俊輔(トランスフォーマティブ生命分 子研究所特任助教)、柳澤直樹(大学院理学 研究科研究員)、佐藤綾人(トランスフォー マティブ生命分子研究所特任講師)と連名 |
| H26. 5.15 | 第49回(平成25年度)東海化学工業会 学術賞 | 大学院工学研究科助教 | 万 春磊 | |
| H26. 5.24 | 第11回(2014年度)日本計量生物学会賞 | 大学院医学系研究科教授 | 松井 茂之 | |
| H26. 5.27 | ROBOMECH 表彰(2013) | 未来社会創造機構教授 | 新井 史人 | |
| H26. 5.27 | ROBOMECH 表彰(2013) | 未来社会創造機構特任助教 | 佐久間臣耶 | |
| H26. 6. 2 | 2014(平成26)年度日本植物病理学会 学会賞 | 大学院生命農学研究科教授 | 川北 一人 | |
| H26. 6. 5 | 電子情報通信学会長特別表彰 | 教養教育院教授 | 山里 敬也 | 他 3 名と連名 |
| H26. 6.11 | 電子情報通信学会 情報・システムソサエティ論文賞 | 大学院情報科学研究科 特任准教授 | 平山 高嗣 | |
| H26. 6.12 | 第30回大平正芳記念賞 | 大学院国際開発研究科 准教授 | 日下 涉 | |
| H26. 6.19 | 日本化学療法学会 第25回上田記念感染症・ 化学療法研究奨励賞 | 大学院医学系研究科助教 | 和知野純一 | |
| H26. 6.19 | Poster Award, World Council of Enterostomal Therapists 2014 | 大学院医学系研究科教授 | 前川 厚子 | 他 3 名と連名 |
| H26. 6.22 | JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014 | 大学院医学系研究科研究員 | 吉見 陽 | 國本正子(大学院医学系研究科客員研究 員)、平川晃弘(医学部附属病院講師)、 尾崎紀夫(大学院医学系研究科教授)、 他 3 名と連名 |
| H26. 6.22 | 日本応用経済学会奨励賞 | 高等研究院特任助教 | 古村 聖 | |
| H26. 7. 1 | 第35回発展途上国研究奨励賞 | 大学院国際開発研究科 准教授 | 日下 涉 | |
| H26. 7. 3 | 日本節足動物発生学会賞「丘英通賞」 | 大学院生命農学研究科助教 | 新美 輝幸 | |
| H26. 7. 6 | 第57回日本腎臓学会 優秀演題賞 | 大学院医学系研究科 特任講師 | 秋山 真一 | 武藤玲子(大学院医学系研究科 D1)、 松尾清一(大学院医学系研究科教授)、 丸山彰一(大学院医学系研究科准教授)と 連名 |
| H26. 7.11 | 情報処理学会 マルチメディア、分散、協調と モバイルシンポジウム(DICOMO2014) 優秀プレゼンテーション賞 | 大学院工学研究科助教 | 梶 克彦 | |

受賞者一覧

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・職名 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|--|--------------------------|-------|---|
| H26. 7.18 | Annals of Nuclear Medicine 2013年引用最多論文賞 | 大学院医学系研究科教授 | 山本 誠一 | 他8名と連名 |
| H26. 7.28 | 日本比較生理生化学会 第23回(2014年度)吉田奨励賞 | 大学院理学研究科特任助教 | 石川 由希 | |
| H26. 7.31 | Best Paper Award, 20th International Conference on Electrical Engineering (ICEE2014) | 大学院工学研究科助教 | 栗本 宗明 | 山下 優(大学院工学研究科 M1)、 加藤丈佳(大学院工学研究科准教授)、 鈴置保雄(大学院工学研究科教授)と連名 |
| H26. 8. 1 | 日本学術振興会 平成25年度特別研究員等 審査会専門委員(書面担当)の表彰 | 大学院医学系研究科教授 | 松井 茂之 | |
| H26. 8. 1 | 日本学術振興会 平成25年度特別研究員等 審査会専門委員(書面担当)の表彰 | 太陽地球環境研究所准教授 | 関 華奈子 | |
| H26. 8. 5 | 平成26年度有機合成化学協会東海支部 奨励賞 | 大学院工学研究科 博士研究員 | 仲辻 秀文 | |
| H26. 8.12 | アメリカ化学会賞 (Arthur C. Cope Scholar Award) | トランスフォーマティブ 生命分子研究所教授 | 伊丹健一郎 | |
| H26. 8.28 | 情報処理学会 平成25年度モバイルコンピュー ティングとユビキタス通信研究会 優秀論文賞 | 大学院工学研究科助教 | 梶 克彦 | 坂 涼司(大学院工学研究科 M2)、 河口信夫(大学院工学研究科教授)と連名 |
| H26. 9. 2 | 平成26年度防災功労者・防災担当大臣表彰 | 減災連携研究センター教授 | 福和 伸夫 | |
| H26. 9. 4 | 日本応用数理学会 ベストオナーサー賞 | 大学院情報科学研究科教授 | 杉山 雄規 | |
| H26. 9. 5 | Groupe Polyphenols Medal | 大学院情報科学研究科 客員教授 | 近藤 忠雄 | |
| H26. 9. 5 | 第28回日本ロボット学会誌論文賞 | 未来社会創造機構教授 | 新井 史人 | |
| H26. 9. 9 | 2014年度日本液晶学会 奨励賞 | 大学院工学研究科助教 | 原 光生 | |
| H26. 9.12 | 平成26年度日本動物学会賞 | 大学院理学研究科教授 | 澤田 均 | |
| H26. 9.12 | 第12回産学官連携功労者表彰 科学技術政策担当大臣賞 | 未来社会創造機構教授 | 高田 広章 | |
| H26. 9.13 | 平成26年度(第11回)日本植物学会 若手奨励賞 | 大学院理学研究科研究員 | 武内 秀憲 | |

学生

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・学年 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|---|--------------------|-------|---|
| H26. 3. 2 | "Bring home the Beacon" Hackathon | 大学院情報科学研究科 M2 | 武市 融紀 | 他2名と連名 |
| H26. 3. 3 | NCSP '14 Student Paper Award | 大学院情報科学研究科 M2 | 森 真貴 | |
| H26. 3.11 | 情報処理学会 第75回全国大会 大会奨励賞 | 大学院情報科学研究科 M1 | 岩月 厚 | 平山高嗣(大学院情報科学研究科助教)、 榎堀 優(大学院情報科学研究科特任助教)、 間瀬健二(大学院情報科学研究科教授)と 連名 |
| H26. 3.15 | 日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部 第41回研究発表会 学生論文賞最優秀賞 | 大学院情報科学研究科 D1 | 呉 偉 | |
| H26. 3.19 | 電子情報通信学会 2013年総合大会 学術奨励賞 | 大学院情報科学研究科 M1 | 谷繁龍之介 | 出口大輔(情報基盤センター准教授)、 井手一郎(大学院情報科学研究科准教授)、 村瀬 洋(大学院情報科学研究科教授)、 他3名と連名 |
| H26. 3.19 | 電子情報通信学会 2013年総合大会 学術奨励賞 | 大学院情報科学研究科 M1 | 浅井 康博 | 出口大輔(情報基盤センター准教授)、 井手一郎(大学院情報科学研究科准教授)、 村瀬 洋(大学院情報科学研究科教授)、 他1名と連名 |
| H26. 4.24 | LEDIA '14 Masahito Yamaguchi Student's Paper Award | 大学院工学研究科 D3 | 光成 正 | |
| H26. 5.12 | 日本顕微鏡学会 第70回記念学術講演会 材料科学部門 優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 M2 | 本田 善岳 | |
| H26. 5.24 | 東海心理学会第63回大会優秀大会発表賞 | 大学院教育発達科学研究科 D1 | 佐名 龍太 | |
| H26. 5.24 | 第78回日本生化学会中部支部奨励賞 | 大学院生命農学研究科 M2 | 中島 史恵 | |
| H26. 5.24 | 第78回日本生化学会中部支部奨励賞 | 大学院生命農学研究科 M1 | 鈴木英里子 | 宮田真路(生物機能開発利用研究センター 特任助教)、佐藤ちひろ(生物機能開発利用 研究センター准教授)、北島 健(生物機能 開発利用研究センター教授)、他1名と 連名 |

受賞者一覧

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・学年 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|---|---------------|-------|---|
| H26. 5.27 | 低温工学・超電導学会 平成26年度 優良発表賞 | 大学院工学研究科 D2 | 鶴田 彰宏 | |
| H26. 5.29 | 日本地球惑星科学連合 2014年大会 学生優秀発表賞 | 大学院環境学研究科 D3 | 阿部 朋弥 | |
| H26. 5.29 | 日本地球惑星科学連合 2014年大会 学生優秀発表賞 | 大学院理学研究科 D2 | 伴場 由美 | 草野完也 (太陽地球環境研究所教授)、 今田晋亮 (太陽地球環境研究所助教) と 連名 |
| H26. 5.29 | 日本地球惑星科学連合 2014年大会 学生優秀発表賞 | 大学院理学研究科 D1 | 小山 響平 | 関華奈子 (太陽地球環境研究所准教授)、 他 2名と連名 |
| H26. 5.29 | 日本地球惑星科学連合 2014年大会 学生優秀発表賞 | 大学院理学研究科 D1 | 中川 真秀 | 笹子宏史 (太陽地球環境研究所技術補佐員)、 中山智喜 (太陽地球環境研究所助教)、 松見 豊 (太陽地球環境研究所教授)、 他 1名と連名 |
| H26. 5.29 | 日本地球惑星科学連合 2014年大会 学生優秀発表賞 | 大学院工学研究科 M2 | 伊藤 史宏 | 平原聖文 (太陽地球環境研究所教授)、 下山 学 (太陽地球環境研究所特任助教)、 小木曾舜 (大学院工学研究科 M2)、他 2名 と連名 |
| H26. 5.29 | 第10回 GIS コミュニティフォーラム マップギャラリー 第2位 | 大学院環境学研究科 M2 | 青柳淳之介 | 杉本賢二 (環境学研究科研究員)、 奥岡桂次郎 (環境学研究科助教)、 谷川寛樹 (環境学研究科教授) と連名 |
| H26. 5.30 | 第63回高分子学会年次大会 優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 M2 | 小栗 良太 | |
| H26. 5.30 | 第63回高分子学会年次大会 優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 小鹿 将誉 | |
| H26. 5.30 | 第63回高分子学会年次大会 優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 中島 慶美 | |
| H26. 5.30 | 電子情報通信学会 知的環境とセンサネット ワーク研究会 若手研究奨励賞 | 大学院工学研究科 M2 | 坂 涼司 | |
| H26. 5.31 | 第36回日本血栓止血学会学術集会 優秀ポスター発表賞 | 大学院医学系研究科 M2 | 中村 友紀 | |
| H26. 6. 4 | 平成26年度日本植物病理学会大会 学生優秀発表賞 | 大学院生命農学研究科 D1 | 安達 広明 | |
| H26. 6. 5 | 電子情報通信学会東海支部学生研究奨励賞 (修士) | 大学院情報科学研究科 M2 | 原 健翔 | |
| H26. 6. 6 | 日本材料科学会 平成26年度学術講演大会 若手奨励賞 (ポスター発表部門) | 大学院工学研究科 M2 | 林 宏樹 | リ オイ ルン ヘレナ (大学院工学研究科 講師) と連名 |
| H26. 6. 7 | シンポジウム モレキュラー・キラリティー 2014 最優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 間宮 文彦 | |
| H26. 6. 7 | シンポジウム モレキュラー・キラリティー 2014 ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 鈴木 規真 | |
| H26. 6. 7 | シンポジウム モレキュラー・キラリティー 2014 ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 中島 慶美 | |
| H26. 6.11 | 2014年日本コンクリート工学会賞 (奨励賞) | 大学院環境学研究科 M2 | 篠野 宏 | |
| H26. 6.12 | Excellent Poster Presentation, 5th JSME/ASME International Conference on Materials and Processing 2014 (ICM & P 2014) | 大学院工学研究科 M1 | 深川 雄貴 | 溝尻瑞枝 (大学院工学研究科助教)、 秦 誠一 (大学院工学研究科教授) と連名 |
| H26. 6.13 | 触媒学会西日本支部第 5 回触媒科学研究発表会 優秀ポスター発表賞 | 大学院工学研究科 M2 | 山本 宗昭 | |
| H26. 6.18 | Best Student Poster Award, IWA Specialist Group | 大学院工学研究科 M2 | 高津 光伸 | 片桐誠之 (大学院工学研究科助教) 入谷英司 (大学院工学研究科教授) と連名 |
| H26. 6.27 | 第14回 AOB 研究会 奨励賞 | 大学院医学系研究科 D4 | 舟橋 諭美 | |
| H26. 6.28 | 日本オペレーションズ・リサーチ学会研究部会 「評価の OR」 学生奨励賞 | 大学院情報科学研究科 D1 | 呉 偉 | |
| H26. 6.29 | 電気化学会北海道支部 第30回ライラックセミナー・第20回若手研究者 交流会 ライラックポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 深津 明弘 | |
| H26. 7. 1 | 名古屋大学 学術奨励賞 | 大学院工学研究科 D3 | 佐々木寛人 | |
| H26. 7. 1 | 名古屋大学 学術奨励賞 | 大学院情報科学研究科 D2 | 胡 艶楠 | |
| H26. 7. 2 | 第35回日本炎症・再生医学会 優秀演題賞 | 大学院医学系研究科 D3 | 見田 常幸 | 山本朗仁 (大学院医学系研究科准教授)、 服部 宇 (医学部附属病院講師)、 上田 実 (大学院医学系研究科教授)、 他 2名と連名 |

受賞者一覧

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・学年 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|---|-----------------|-------|--|
| H26. 7. 2 | 第35回日本炎症・再生医学会 優秀演題賞 | 大学院医学系研究科 D3 | 泉本 貴子 | 山本朗仁 (大学院医学系研究科准教授)、恒川 新 (医学部附属病院助教)、上田 実 (大学院医学系研究科教授)、他8名と連名 |
| H26. 7. 3 | 第9回2014年度ロレアル-ユネスコ女性科学者日本奨励賞 | 大学院理学研究科 D2 | 八木重樹子 | |
| H26. 7. 6 | 第57回日本腎臓学会 優秀演題賞 | 大学院医学系研究科 D4 | 遠藤 信英 | 坪井直毅 (医学部附属病院講師)、松尾清一 (大学院医学系研究科教授)、丸山彰一 (大学院医学系研究科准教授) と連名 |
| H26. 7.10 | 3次元画像コンファレンス2013 優秀論文賞 | 大学院工学研究科 M2 | 手塚 智之 | 藤井俊彰 (大学院工学研究科教授) と連名 |
| H26. 7.10 | 日本アイソトープ協会 平成26年度「放射線基礎セミナー」 優秀賞 | 大学院工学研究科 D3 | 能任 琢真 | |
| H26. 7.11 | 創薬懇談会2014 ベストディスカッション賞 | 大学院工学研究科 D3 | 澤村 泰弘 | |
| H26. 7.11 | 創薬懇談会2014 優秀ポスター賞 | 大学院工学研究科 D3 | 澤村 泰弘 | |
| H26. 7.11 | 情報処理学会 マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2014) 優秀プレゼンテーション賞 | 大学院工学研究科 M1 | 村田 雄哉 | |
| H26. 7.11 | 情報処理学会 ヤングリサーチャー賞 | 大学院情報科学研究科 M1 | 藪 圭輔 | |
| H26. 7.11 | 第36回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞 | 大学院環境学研究科 M2 | 伊藤 充希 | |
| H26. 7.22 | CLAWAR Association Best Technical Paper Award, 17th International Conference on Climbing and Walking Robots | 大学院工学研究科 M2 | 岸 俊道 | 稲垣伸吉 (大学院工学研究科講師) と連名 |
| H26. 7.24 | Student Poster Award, Nagoya Univ.-Tsinghua Univ.-Toyota Motor Corp.-Hokkaido Univ. Joint Symposium — Materials Science and Nanotechnology for the 21st Century — | 大学院工学研究科 M2 | 成瀬 亘 | |
| H26. 7.25 | Poster Award, The 18th International Symposium on ADMD 2014 | 大学院工学研究科 D3 | 佐野 誠実 | |
| H26. 8. 1 | Honorable Mention, 2nd International Conference on Time Perspective | 大学院教育発達科学研究科 D1 | 石井 僚 | |
| H26. 8. 1 | Best Poster Award, 2nd International Conference on Time Perspective | 大学院教育発達科学研究科 M2 | 吉田 未来 | 金井篤子 (大学院教育発達科学研究科教授) と連名 |
| H26. 8. 1 | 日本生物工学会中部支部平成26年度例会 中部支部 支部長賞 | 大学院工学研究科 D3 | 佐々木寛人 | |
| H26. 8. 1 | MIRU2014若手プログラム Audience Award | 大学院情報科学研究科 D1 | 原 健翔 | |
| H26. 8. 1 | MIRU2014若手プログラム Best Wakate Presentation Award | 大学院情報科学研究科 D1 | 原 健翔 | |
| H26. 8. 1 | 第68回セメント技術大会優秀講演者賞 | 大学院環境学研究科 M2 | 篠野 宏 | |
| H26. 8. 2 | 情報処理学会データベースシステム研究会 学生奨励賞 | 大学院情報科学研究科 M2 | 杉浦 健人 | |
| H26. 8. 6 | 名古屋大学若手女性研究者サイエンスフォーラム ポスター賞 | 大学院理学研究科 M1 | 前田 果歩 | |
| H26. 8. 6 | 名古屋大学若手女性研究者サイエンスフォーラム ポスター賞 | 大学院理学研究科 M1 | 柴田 万織 | |
| H26. 8. 8 | 触媒学会若手会 第35回触媒夏の学校の研修会 優秀ポスター発表賞 | 大学院工学研究科 M2 | 馬原 優治 | |
| H26. 8. 8 | 平成26年度植物感染生理談話会 優秀発表賞 | 大学院生命農学研究科 D1 | 安達 広明 | |
| H26. 8. 9 | 第四十六回構造有機化学若手の会 夏のポスター発表 ポスター講師賞 | 大学院工学研究科 D2 | 伊藤 覚 | |
| H26. 8.10 | 第29回日本下垂体研究会学術集会 最優秀発表賞 | 大学院生命農学研究科 D3 | 美辺 詩織 | |
| H26. 8.10 | 第29回日本下垂体研究会学術集会 最優秀発表賞 | 大学院生命農学研究科 D3 | 家田菜穂子 | |
| H26. 8.19 | Student Award, 20th IEA World Congress of Epidemiology | 大学院医学系研究科 D4 | 上村 真由 | イサヤス ハラゴットウ ヒラウエ (大学院医学系研究科 D4)、八谷 寛 (大学院医学系研究科客員教授)、青山温子 (大学院医学系研究科教授)、他6名と連名 |

受賞者一覧

| 受賞日 | 受賞名 | 受賞者の所属・学年 | 受賞者 | 備考 |
|-----------|--|---------------|-------|----|
| H.26.8.22 | 第8回レドックス・ライフイノベーション第170委員会 ポスター賞 | 大学院生命農学研究科 M2 | 中島 史恵 | |
| H26. 8.28 | 第7回メルク賞ー Merck Award for Young Biochemistry Researcher | 大学院理学研究科 D3 | 白瀧千夏子 | |
| H26. 8.28 | 日本オペレーションズ・リサーチ学会 学生論文賞 | 大学院情報科学研究科 D1 | 呉 偉 | |
| H26. 8.29 | TIA 連携大学院 第二回 TIA ナノエレクトロニクス・サマースクール ポスター奨励賞 | 大学院工学研究科 D2 | 山羽 隆 | |
| H26. 8.29 | TIA 連携大学院 第二回 TIA ナノエレクトロニクス・サマースクール ポスター奨励賞 | 大学院工学研究科 D2 | 浅野 孝典 | |
| H26. 9. 6 | 高分子学会東海支部 学生研究奨励賞 | 大学院工学研究科 D2 | 副島 敬正 | |
| H26. 9. 6 | 高分子学会東海支部 学生研究奨励賞 | 大学院工学研究科 D2 | 田中 大介 | |
| H26. 9. 6 | 高分子学会東海支部 学生研究奨励賞 | 大学院工学研究科 M2 | 熊野 大輔 | |
| H26. 9. 6 | 高分子学会東海支部 学生研究奨励賞 | 大学院工学研究科 M1 | 間宮 文彦 | |
| H26. 9. 6 | 高分子学会東海支部 学生研究奨励賞 | 大学院工学研究科 M1 | 向井 孝次 | |
| H26. 9. 8 | 日本機械学会機素潤滑設計部門 第20回卒業コンテスト最優秀発表 | 大学院工学研究科 M1 | 柴沢 穂高 | |
| H26. 9. 8 | 日本機械学会機素潤滑設計部門 第20回卒業コンテスト最優秀発表 | 大学院工学研究科 M1 | 市村 和之 | |
| H26. 9. 9 | 第25回基礎有機化学討論会 ポスター賞 | 大学院理学研究科 D2 | 松尾 恭平 | |
| H26. 9. 9 | 第25回基礎有機化学討論会 ポスター賞 | 大学院理学研究科 D1 | 大崎 博司 | |
| H26. 9. 9 | 第25回基礎有機化学討論会 ポスター賞 | 大学院工学研究科 M1 | 松野 崇志 | |

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年8月16日～9月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------------------|-----------------|
| 1 ポスドク・博士課程後期課程学生のための合同企業説明会開催：30日 豊田講堂で開かれる | 8.16 (土) | 中日 (朝刊) |
| 2 吹奏楽団 OB バンド演奏会 なごすいの休日開催：31日 | 8.16 (土) | 中日 (朝刊) |
| 3 外山修之本学名誉教授がスウェーデン王立科学アカデミーの選考資料からノーベル化学賞の候補者だったことが分かった | 8.16 (土) | 読売 |
| 4 あいち賢人：日本で初めてコンタクトレンズ開発 水谷 豊氏名古屋医科大学卒業生 | 8.16 (土) | 中日 (朝刊) |
| 5 本学で小児外科を学んだバングラデシュ・あいち病院院長モアゼム・ホセイイン氏が同病院の器具の提供を求めている | 8.16 (土) | 中日 (朝刊) |
| 6 ラジオ公開講座「おもしろいことは“境界”で起こる」：講師 川北一人生命農学研究科教授 | 8.17 (日) | 中日 (朝刊) |
| 7 Viva 地球：ショウジョウバエの求愛の羽音で音を理解する脳の仕組みを研究 上川内あづさ理学研究科教授 | 8.18 (月) | 中日 (朝刊) |
| 8 教えて、センセイ！：避難ルート 複数準備を 新井伸夫減災連携研究センター特任教授 | 8.18 (月) | 中日 (朝刊) |
| 9 「マニフェスト作成交流会」開催：17日 杉山優有奈さん本学1年生は「普段とは違った視点で行政の課題を意識することができ、有意義だった」と語る | 8.18 (月) | 中日 (朝刊) |
| 10 中村英樹環境学研究科教授がラウンドアバウトの導入を呼びかけていることが紹介される | 8.18 (月) | 朝日 (夕刊) |
| 11 石上雅俊医学部附属病院講師がC型肝炎について解説 | 8.19 (火) | 中日 (朝刊) |
| 12 子どもたちよ！2014 私の戦争体験4：塩澤君夫本学名誉教授が学徒出陣と特攻について語る | 8.19 (火) | 中日 (朝刊) |
| 13 上垣外正己工学研究科教授と佐藤浩太郎同准教授などは2種類の原料から高分子を合成するポリマー合成手法を開発 | 8.19 (火) | 日経産業 |
| 14 いのちを守る防災：長周期地震動 警報へ模索 検討会座長の福和伸夫減災連携研究センター教授は「情報の質によって活用のあり方も変わってくる」と語る | 8.20 (水) | 毎日 (朝刊) |
| 15 第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」開催：7月24日～11月29日 | 8.20 (水) | 朝日 (夕刊) |
| 16 チャタムハウスシンポジウム「変貌するアジアにおける日本の新たな役割」開催：31日 麻生太郎副総理・財務相、トヨタ自動車株式会社代表取締役会長内山田竹志氏本学卒業生が講演 | 8.21 (木) 8.28 (木) | 朝日 (朝刊) 日刊工業 |
| 17 減災連携研究センター主催『「備える3.11から」ライブ！』サブイベント「減災館・夏休みスペシャル減災教室」開催：24日 小中学生向けイベント | 8.21 (木) | 中日 (朝刊) |
| 18 田中隆文生命農学研究科准教授は土砂災害から身を守るために「家の中でも少しでも安全な場所に移動してほしい」と語る | 8.21 (木) | 中日 (朝刊) |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年8月16日～9月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------------------|--------------------|
| 19 十六銀行が法学研究科との相互協力の一環でアジアの大学生向けの講義を聞いた | 8.21 (木) | 日経 (朝刊) |
| 20 戦略新トップ発: 中日本高速道路株式会社代表取締役社長宮池克人氏本学大学院修了 | 8.22 (金) | 日経 (朝刊) |
| 21 リケジョのススメ: トヨタグループ 3人に聞く 本学で研究した豊田合成株式会社岩田阿佑美氏 | 8.22 (金) | 中日 (朝刊) |
| 22 本学と沖縄科学技術大学院大学、慶応義塾大学などの研究グループは脳内の一部で「セロトニン」が増えると、時間を待つ「辛抱強さ」が高まることをマウスの実験で発見 | 8.22 (金) | 日経 (夕刊) |
| 23 附属図書館医学部分館、大学文書資料室企画展「戦争と大学ー1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学ー」開催: 1日～31日 堀田慎一郎大学文書資料室特任助教は女優森 光子氏の気持ちがかがえる田ノ井貞治氏の滝仲孟雄大尉についての手記について「森さんが最後まで心に秘めていた相手なのでしょうか。戦時中のエピソードに関心を持ってもらえたら」と語る | 8.23 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 24 片山雄己さん理学部1年生が広島に帰省中に広島市北部の土砂災害が起こり、ボランティアとして復旧作業を手伝っている | 8.24 (日) | 中日 (朝刊) |
| 25 ラボ通信: 超多収イネ 開発を 平野 恒生物機能開発利用研究センター特任助教 | 8.25 (月) | 読売 |
| 26 「ユネスコ会議」控え「子ども会議」杉山範子環境学研究科特任准教授は子どもたちにESDとは「未来の子どもたちも今の子どもたちも、楽しく幸せに暮らせる社会のため、環境や貧しさなどについて学び合うこと」と語る | 8.25 (月) | 中日 (朝刊) |
| 27 ブラジル特集: 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が安倍首相と共にブラジル訪問 | 8.25 (月) | 日経 (朝刊) |
| 28 故長尾健太郎本学助教をたたえて算数オリンピックに「長尾賞」が新たに創設され、小学校1年～3年生の成績優秀者に贈られた | 8.25 (月) | 中日 (朝刊) |
| 29 減災連携研究センター主催『備える3.11から』ライブ! 大震災を生き抜く』開催: 24日 | 8.25 (月) 9. 4 (木) | 中日 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 30 医人伝: 本学医学部で学んだ名古屋第二赤十字病院総合周産期母子医療センター長加藤紀子氏 | 8.26 (火) | 中日 (朝刊) |
| 31 中日本高速道路株式会社代表取締役社長宮池克人氏本学大学院修了に聞く 入札新制度で不調減少 | 8.26 (火) | 中日 (朝刊) |
| 32 ただ今 就活中: 企業が求める人材 本学大学院で研究に励んだ株式会社ノリタケカンパニーリミテド人事部山下剛広氏に聞く | 8.26 (火) | 中日 (朝刊) |
| 33 本学や東京大学など RU11は国際化における研究基盤の抜本強化に向けた政策提言を発表 | 8.26 (火) 8.27 (水) | 日経 (夕刊) 日刊工業 |
| 34 鷺谷 威減災連携研究センター教授が日本海で地震発生時の津波の高さや到達時間を発表した国の有識者検討会の委員と紹介される | 8.27 (水) | 読売 日刊工業 |
| 35 いのちを守る防災:名古屋大学 減災研究教育の拠点開設 福和伸夫減災連携研究センター教授は減災館の目標を「研究成果を素早く社会に還元すること」と語る | 8.27 (水) | 毎日 (朝刊) |
| 36 ワーキング・ウーマン講演会「安倍政権の女性政策をどう見るか?」開催: 30日 田村哲樹法学研究科教授が講演 | 8.27 (水) | 朝日 (朝刊) |
| 37 日本物理学会市民科学講演会「私たちの生活をかえる物質科学」開催: 9月6日 IB 電子情報館にて | 8.28 (木) | 読売 |
| 38 チャタムハウスシンポジウム「変貌するアジアにおける日本の新たな役割」開催: 31日 麻生太郎副総理・財務相が講演し、トヨタ自動車株式会社代表取締役会長内山田竹志本学卒業生が講演で「成長には女性の活躍も欠かせない」と語る | 9. 1 (月) | 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) |
| 39 第6回国際樹木根会議・市民向け公開講座「人と環境を支える植物の根」開催: 9月7日 平野恭弘環境学研究科准教授が「根の研究は発展途上にある。その面白さを感じてもらえたらうれしい」と語る | 8.29 (金) 9. 9 (火) | 中日 (朝刊) 毎日 (朝刊) |
| 40 「心配して」のメッセージ 武村雅之減災連携研究センター教授が災害史を知る意義を語る | 8.31 (日) | 毎日 (朝刊) |
| 41 備える3.11から: 身を守るため どんな備え? 曾根好徳減災連携研究センター寄附研究部門教授 | 9. 1 (月) | 中日 (朝刊) |
| 42 大幸財団学術研究助成:「自然免疫経路の内因性リガンドの探索を通じた神経系の恒常性維持機構の解明」山中宏二環境医学研究所教授 | 9. 1 (月) | 中日 (朝刊) |
| 43 医人伝: 信頼関係築き、断酒を支援 刈谷病院副院長菅沼直樹氏本学卒業生 | 9. 2 (火) | 中日 (朝刊) |
| 44 第41回全日本大学選手権大会(インカレ) ポート競技: 女子舵手なしペア 優勝 榊原舞子さん農学部4年生と関根優佳さん医学部保健学科3年生 中野富夫法学研究科准教授は「制約の多い合宿生活を選び、文武両道が頼もしい」と語る | 9. 3 (水) | 中日 (朝刊) |
| 45 本学や東京大学など RU11は先端研究支援のための基盤強化と若手研究者の雇用安定を求める提言を発表 | 9. 4 (木) | 毎日 (朝刊) |
| 46 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生を政府が経済財政審問会議の民間議員に起用する方針 | 9. 4 (木) | 日刊工業 |
| 47 本学の衛星「チューブサット2」が2015年度に打ち上げ予定のX線天文衛星「ASTRO-H (アストロ・エッチ)」に相乗りする超小型衛星に選ばれた | 9. 5 (金) | 日刊工業 |
| 48 静岡県川勝平太知事が2014年度の全国学力テストの成績上位校長名を公表することについて中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は「知事には権限がない中で、校長名や市町村別成績を公表したことは明らかにおかしい」と語る | 9. 5 (金) | 中日 (朝刊) |
| 49 大内乗有医学系研究科教授と室原豊明同教授のグループは心臓から分泌されるホルモンが慢性腎臓病の進行に保護的な作用を示すことを突き止めた | 9. 5 (金) | 科学新聞 |
| 50 第12回産学官連携功労者表彰: 科学技術担当大臣賞 高田広章未来社会創造機構教授とNPO法人のTPPERSプロジェクト | 9. 5 (金) | 日刊工業 |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年8月16日～9月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|--|----------------------|--------------------|
| 51 第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」開催：7月24日～11月29日 足立 守 PhD 登龍門推進室特任教授は「夏に熱かった石が秋になると冷たくなる。そんな季節感も感じてほしい」と語る | 9. 6 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 52 中世史研究会2014年度総会・大会開催：13日 稲葉伸道文学研究科教授が「後醍醐政権の寺社政策」について講演 | 9. 6 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 53 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：10月18日 益川敏英本学特別教授と下村 脩同特別教授が名古屋国際会議場で講演 | 9. 6 (土) | 読売 |
| 54 政府は日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生を政府の経済財政審問会議の民間議員に充てる人事を発表 | 9. 6 (土) | 毎日 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 55 病院の実力：乳がん 医学部附属病院の実績が紹介される | 9. 7 (日) | 読売 |
| 56 平成26年度愛知大学野球秋季リーグ戦2部Aリーグ：野球部は1-2で愛知産業大学に敗れた 七原優介さん教育学部4年生は「この秋は結果だけを意識する」と語る | 9. 7 (日) | 中日 (朝刊) 中日スポーツ |
| 57 中部大学開学50周年記念シンポジウム開催：18日 丹羽宇一郎本学名誉博士が講演 | 9. 7 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 58 名大研究室の扉 in 河合塾開催：14日 小川 光経済学研究科教授、10月12日 高橋雅英医学系研究科教授が講演 | 9. 8 (月) | 中日 (朝刊) |
| 59 毎日文化センター講座「江戸尾張～名古屋、時を超えて ぶらり古地図散歩」開催：溝口常俊本学客員教授 | 9. 9 (火) | 毎日 (朝刊) |
| 60 血管治療最前線：普及進むハイブリッド手術室 古森公浩医学系研究科教授は血管造影装置を備え付けた手術室について「画像が鮮明になり、大画面で見やすい。ステントグラフトなどの血管内治療に、外科的手術を組み合わせた『ハイブリッド治療』も、さらに安全にやりやすくなった」と語る | 9. 9 (火) | 中日 (朝刊) |
| 61 福井康雄理学研究科教授、鳥居和史同研究員などのグループは「彼岸花星雲」と「出目金星雲」の中の大きな星が、水素分子でできた大きなガス雲同士の衝突によって形成されたことを突き止めた | 9.10 (水) | 中日 (朝刊) |
| 62 2015国公立大学入試要項：名古屋大学 | 9.10 (水) | 中日 (朝刊) |
| 63 法務省が2014年の司法試験合格者を発表し本学は30名が合格し合格率22.56% | 9.10 (水) | 読売 他4社 |
| 64 永峰康一郎情報科学研究科准教授が日本地球化学会の講師派遣事業の一環として愛知産業大学三河中学校で授業を行った | 9.10 (水) | 中日 (朝刊) |
| 65 中日文化センター新講座：「王朝美の表と裏 宮廷社会における二つの美の原理」伊藤大輔文学研究科教授、「知的書評合戦 ビブリオバトル入門」飯島玲生リーディング大学院推進機構本部特任助教 | 9.10 (水) | 中日 (夕刊) |
| 66 増田知子法学研究科教授が「昭和天皇実録」を読んだ感想を語る | 9.11 (木) | 読売 |
| 67 時時刻刻：原発地元 範囲どこまで 本学や東北大学の教授らが浜岡原発のある静岡県での中部電力株式会社の安全対策や避難計画を独自に検証していると報じられる | 9.11 (木) | 朝日 (朝刊) |
| 68 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授などのグループは植物の受精の瞬間におけるカルシウムシグナルをとらえることに成功 | 9.11 (木) | 毎日 (夕刊) |
| 69 八木哲也医学系研究科教授は Deng 熱について「表面化していないだけで（中部地方でも）既に患者がいる可能性も否定できない。蚊との接触をできるだけ避けるといことが大切になる」と語る | 9.11 (木) 9.12 (金) | 中日 (夕刊) 科学新聞 |
| 70 本学や東京大学など国内14大学と産業技術総合研究所などの女性理事、研究者ら約50人が女性研究者の割合を増やすための数値目標の設定などを求める提言をまとめ、文部科学省に提出 | 9.12 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 71 科学論文は「作戦と議論」学術誌元編集長、体験談交え伝授 上出洋介本学名誉教授が本学で行われた公開講義の中で論文の盗用などについて「人間に与えられた特権や個性を否定するもの。『悪意がなかった』は認められない」と語る | 9.12 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 72 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は竹下 亘復興相との会談で被災地の復興のために「製造業の誘致を促進する思い切ったインセンティブを検討してほしい」と語る | 9.12 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 73 本学や京都大学、国立循環器病研究センターなどのチームが長寿遺伝子産物 SIRT 1 (サーチュイン) の活性化で神経難病 ALS マウスが延命したと発表 | 9.13 (土) | 日経 (夕刊) |
| 74 本学で博士号取得した信州大学特別特任教授遠藤守信氏が農場の現場で捨てていた廃棄物から、ハイテク素材を生み出す研究を開始すると発表 | 9.13 (土) | 中日 (朝刊) |
| 75 室原豊明医学系研究科教授は iPS 細胞の移植手術が行われたことについて「安全性が確認されれば、さらに大きな前進だ」と語り、寺崎浩子医学系研究科教授は「眼科治療全体に大きな光がさしたことは間違いない」と語る | 9.13 (土) | 中日 (朝刊) |
| 76 大幸財団研究助成：藤田真哉経済学研究科准教授 | 9.14 (日) | 中日 (朝刊) |
| 77 「錦三ストーリー」司城志朗本学卒業生著 | 9.14 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 78 ラボ通信：台風予測モデルを開発 坪木和久地球水循環研究センター教授 | 9.15 (月) | 読売 |
| 79 第92回全日本選手権大会 (ボート)：女子舵手なしペア 2位 名古屋大学 | 9.15 (月) | 中日 (朝刊) |

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月24日(木)～11月29日(土)
場 所：博物館前庭、テラス、
特別展示会場
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第19回博物館特別展「絹谷幸太 創知彫刻」

[関連特別講演会]
場 所：博物館3階講義室
時 間：14:00～15:30
講演題目：「創知が世界を救う」(10/29)
講 演 者：島田久仁彦氏(環境省参与)
講演題目：「博物館の楽しみ方」(11/5)
講 演 者：栗原祐司氏(国立文化財機構本部事務局長)
講演題目：「名古屋大学キャンパスマスタープラン」(11/12)
講 演 者：谷口 元(施設・環境計画推進室特任教授)
対 象：一般
参 加 費：無料



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

**9月1日(月)～10月24日(金)、
11月5日(水)～12月26日(金)**
場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階
時 間：10:00～16:00
休 館 日：土・日・祝日(10/18は開館)
入 場 料：無料

**博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示
「水辺の宝石ートンポー」(9/1～10/24)
「スノーボールアースからカンブリア爆発へ」(11/5～12/26)**

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



9月27日(土)～11月3日(月)
場 所：愛知県全域

あいちサイエンスフェスティバル2014

内 容：県内の高等教育研究機関や社会教育施設と連携し、
さまざまなサイエンスイベントを開催

[問い合わせ先]
学術研究・産学官連携推進本部
あいちサイエンスフェスティバル事務局
052-747-6527



10月8日(水)～1月30日(金)
場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール
時 間：9:00～20:00(平日)
(1/5～7は9:00～17:00)、
13:00～17:00(土曜日)
休 館 日：日・祝日、12月29日～1月3日
入 場 料：無料

**附属図書館医学部分館第8回ミニ展示会
「医心 絵心ー医師たちの画カー」**

内 容：愛知医科大学の解剖学者 奈良坂源一郎の博物画、県立愛知医科大学の皮膚科学者 太田正雄(木下圭太郎)の絵画など、解剖図だけでなく、人物、静物、動植物などの多様なモチーフに発揮された先輩医師たちの素晴らしい画力を展示公開する

[問い合わせ先]
附属図書館医学部分館 052-744-2505



10月18日(土)～11月6日(木)
場 所：中央図書館2階ビブリオサロン
時 間：9:00～17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

**附属図書館2014年秋季特別展
「時を超える贈り物ー所属資料が語る学びの世界ー」**

[問い合わせ先]
附属図書館情報サービス課 052-789-3684



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月18日(土)

場 所：東山キャンパス
時 間：10:00～
参 加 費：無料

第10回ホームカミングデー

「情報化社会における融和からの発展」

内 容：名古屋大学の集い、学術講演、名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート、名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室、あかりんご隊科学実験、施設公開・見学ツアー、他



[問い合わせ先]

総務部広報渉外課 052-747-6558

10月21日(火)

場 所：ES 総合館 ES ホール
時 間：13:00～17:05
対 象：一般
参 加 費：無料

国連デー記念イベント at Nagoya University

ーウェルビーイングの実現に向けて私たちができることー

内 容：基調講演、学生討論セッション、パネルディスカッション、クロスカルチュラルパフォーマンスショー



[問い合わせ先]

国際開発研究科 052-789-5068

10月23日(木)

場 所：減災館 1階減災ホール
時 間：18:00～19:30
定 員：80名
対 象：一般
参 加 費：無料

第104回防災アカデミー

講演題目：「100年前の桜島噴火災害に学ぶ」
講 演 者：柳川喜郎氏 (元日本放送協会職員)



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

10月24日(金)

場 所：環境総合館 3階講義室 2
時 間：13:30～15:30
定 員：80名
対 象：研究者、一般
参 加 費：無料

国際シンポジウム

「モンゴル 多数のハザードをまとめて考える」



[問い合わせ先]

環境学研究科 052-789-5802

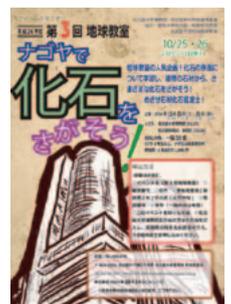
10月25日(土)、26日(日)

場 所：博物館 2階実験室 (10/25)、
名古屋駅周辺、栄地区 (10/26)
時 間：13:30～16:30 (10/25)、
9:30～15:00 (10/26)
定 員：30名
対 象：小学3年生以上、一般
(小学生は保護者同伴)
参 加 費：1,000円

名古屋市科学館共催事業 平成26年度第3回地球教室

「ナゴヤで化石をさがそう！」

内 容：化石の断面について学習し、建物の石材からさまざまな化石をさがす



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月25日(土)

場 所：文学部 2階237講義室
時 間：13:30~15:30
対 象：一般
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

文学研究科附属
人類文化遺産テキスト学術センター
教授 木俣元一 imago@lit.nagoya-u.ac.jp

第31回渋沢・クロード賞本賞（2014年度）受賞記念 公開講演

講演題目：「文化遺産の表象、19世紀における生成と変容
ーパリ、ノートルダム大聖堂の保存・修復を中心にー」
講演者：泉 美知子氏（國學院大學非常勤講師）



10月27日(月)

場 所：野依記念学術交流館 2階
カンファレンスホール
時 間：10:00~18:00
定 員：300名
対 象：有機合成化学に興味のある方
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

トランスフォーマティブ生命分子研究所
特任助教 宮崎亜矢子 052-789-4999

第20回名古屋メダルセミナー

講演者：ジョン・ハートウィッグ氏（カリフォルニア大学
パークレー校教授）、浜地 格氏（京都大学教授）
※全て英語で行われます
内 容：有機合成化学



11月8日(土)、11月29日(土)、 12月13日(土)、1月24日(土)

場 所：理農館 3階335号室
時 間：10:00~15:00

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部
ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター 平成26年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「ベンチャー精神、ベンチャー企業の現状」、
「博士人材が持っているべき素養・素質について考える
ー自己の強みを意識し、表現するスキルを習得しようー」（10/4）
「弁理士業務の実際と将来求められる人物像」、
「シンクタンク業界の業務の実際
ーアカデミアの研究、シンクタンクの『研究』ー」（11/8）
「Communications Styles – helping you to create good and
lasting impressions –」、「国内／海外の再生医療業界について」（11/29）
「博士の就活スタート・リスタート
ー社会からの評価と自己評価・私らしい未来を獲得するためにー」、
「プレゼンテーションスキル研修
ー研究発表を、誰にでもわかりやすくプレゼンテーションー」（12/13）

11月9日(日)

場 所：豊田講堂
時 間：9:30~18:00

[問い合わせ先]

愛知学長懇話会事務局 052-747-6587

ESD 大学生サミット

内 容：「ESD 大学生リレー・シンポジウム」の成果を持ち寄り、全国の
大学生に募集する活動事例を含めて、持続可能な社会の実現に
向けて大学生が知恵を出し合う



11月12日(水)

場 所：博物館野外観察園、
博物館 2階展示室
時 間：13:00~15:00
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館野外観察園見学会

講 師：西田佐知子（博物館准教授）、
野崎ますみ（同研究員）
内 容：季節の花をみながら自然を学び、電子顕微鏡でミクロの自然を
見る



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月20日(木)

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール

時 間：17:00～19:00

参 加 費：無料

仁科記念講演会

講演題目：「冷却原子を用いた量子シミュレーション」

講 演 者：高橋義朗氏（京都大学教授）

講演題目：「クォーク物理学の展開」

講 演 者：三田一郎（本学名誉教授）



[問い合わせ先]

理学研究科

教授 野尻伸一 052-789-4537

12月12日(金)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社
3階会議室（名古屋市中区）

時 間：18:30～20:00

定 員：100名

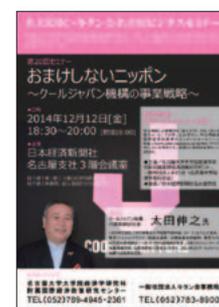
対 象：一般

参 加 費：無料

国際経済政策研究センター・キタン会 第20回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「おまけしないニッポン〜クールジャパン機構の事業戦略〜」

講 演 者：太田伸之氏（クールジャパン機構代表取締役）



[問い合わせ先]

経済学研究科附属国際経済政策研究センター

052-789-4945

名大トピックス No.257 平成26年10月17日発行

編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

本学での共同記者会見において握手を交わす赤崎特別教授(右)と天野教授(左)
(平成26年10月10日)



150 神宮皇学館文庫と神宮皇学館大学関係文書

名古屋大学は、戦前の官立神宮皇学館大学に由来する2つの資料群を所蔵しています。

1つは、附属図書館所蔵の神宮皇学館文庫です。多くが伊勢神宮御師の来田新左衛門家から伝来した、2万4千点を超える神宮皇学館大学の旧蔵書で、歌書・連歌書・有職故実書を中心に価値の高い資料が多く含まれています。中央図書館の準貴重図書として、一般の利用に供されていません（閲覧には事前申請が必要です）。

もう1つは、神宮皇学館文庫と違ってほとんど知られていませんが、大学文書資料室所蔵の神宮皇学館大学関係文書です。数は100点余りで、そのうち40点ほどは、同大学の人事及び同大学廃止後の残務整理に関する事務文書です。そのほかは刊行物で、ほとんどが同大学とその前身である神宮皇学館（旧制専門学校）が毎年刊行していた小冊子『神宮皇学館（大学）一覧』です。他の機関には、ここ

までのバックナンバーがそろっている例はありません。これらも一般に公開しています（事務文書の閲覧には、公開制限に関する審査が必要です）。

この2つの資料群を名大が所蔵している歴史的背景は共通しています。神宮皇学館大学は、1940(昭和15)年4月、神宮皇学館を母体として、現在の三重県伊勢市に設置されました。しかし敗戦後、GHQのいわゆる神道指令により、1946年3月に廃止となりました。

この時、同大学の蔵書を各機関に分配する計画もありましたが、名大が貴重な蔵書群の分散を惜しみ、文部省へ一括受け入れを強く希望した結果、1948年3月に神宮皇学館文庫として附属図書館に収められました。また名大は神宮皇学館大学廃止後、その旧教職員や卒業生の在籍証明などの事務を引き継ぎました。これにより、同大学が管理していた関係文書が名大に移管されたのです。



| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | | |

- 1 神宮皇学館文庫の『古今和歌集』の表紙。
- 2 写真1の1頁目。名大のほか、右上に神宮皇学館大学の蔵書印も見られる。
- 3 神宮皇学館大学関係の事務文書。大学の廃止に伴い、「元神宮皇学館大学整理事務所」が置かれたが、同所が1947年3月に廃止されると、名大がその業務を引き継いだ。
- 4 『神宮皇学館大学一覧』。大学文書資料室には、神宮皇学館時代を含めると、1907年から1942年までのほとんどの年のものがそろっている。
- 5 『毎日新聞（大阪）』1946年2月17日。神宮皇学館大学を名大が吸収し、文学部の母体にしようとする動きがあったが、実現しなかった。
- 6 神宮皇学館大学正門（『皇学館大学百年小史』より）。